



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

全日畜ワークショップ（広島会場） 自然災害に強い畜産経営を目指して

速報レポート

- ◎ 開催日 令和3年10月21日（木曜日）
- ◎ 時間 13：00（開会）から15：30（閉会）
- ◎ 集会形態 リモートによるWeb集会「Zoomミーティング」

令和3年11月

全 日 畜

（一般社団法人 全日本畜産経営者協会）

はじめに

私たち、畜種横断の畜産生産者の団体「全日畜」は、令和3年度の日本中央競馬会畜産振興事業として「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」を実施しております。

この事業は、近年多発している台風・豪雨災害等が畜産経営に甚大な被害をもたらしていることを踏まえまして、この調査において、畜産経営者が参加するワークショップの開催や、アンケート調査の実施等を通して、災害時の対応を明確にし、自然災害に強い畜産経営の実現を図ることを目的としています。

本書は、令和3年10月21日（木）に実施した、全日畜ワークショップ（広島会場）「自然災害に強い畜産経営を目指して」の概要を整理した「速報レポート」です。今回は新型コロナウイルスの感染症拡大に伴いリモートによるWEB集会といたしました。近年繰り返し発生している豪雨災害の被害状況、対応状況などを中心に、参加の皆様が活発な発表、発言により、有意義なものとなっております。多くの方にご覧いただき、最近頻発する自然災害に強い安定した畜産経営の実現の一助となれば幸いです。

令和3年11月

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全日畜)

自然災害に強い畜産経営を目指して

- ◎ 開催日 令和3年10月21日（木曜日）
- ◎ 時間 13:00（開会）から15:30（閉会）
- ◎ 集会形態 リモートによるWeb集会「Zoomミーティング」
- ◎ プログラム

第一部 13:00 ~ 14:15

H30年度の豪雨災害や線状降水帯災害等で大きな被害を被った畜産経営者等をゲストに招き、生産現場の実態等についてご報告をいただきます。

第二部 14:15 ~ 15:30

ご参加された皆さんと一緒に、自然災害に対応した畜産経営の在り方を考え、安定した畜産経営の継続を目指すための意見交換を行います。

（ 全 日 畜 ）

一般社団法人 全日本畜産経営者協会

1 全日畜ワークショップ「広島会場」の概要紹介

- ◎ 開催日 令和3年10月21日（木曜日） 13:00 ～ 15:30
- ◎ 形態 リモートによるWeb集会「Zoomミーティング」
- ◎ テーマ 自然災害に強い畜産経営を目指して

2 「H30年豪雨災害」や「線状降水帯災害」等を踏まえて意見交換

	<p>広島県 農林水産局 畜産課 酪肉振興グループ 主査 宇田 久康 様 (行政機関からの報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 広島県の畜産の現状を報告 • 平成30年令和3年の豪雨の被害状況、被害額等を行政機関から報告 • これらの災害に対しての行政側からの支援対応状況を報告
	<p>農事組合法人 萩原ハイランドファーム代表 瀧奥 拓二郎 様 (H22年豪雨災害の報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 平成22年、令和3年の豪雨被害を報告 H22年飼料畑の一部及び育成牛舎、育成牛が流出 R3年落雷で搾乳ロボットほか電子機器破損 • これらの災害被害は共済保険、任意の動産総合保険で復旧できたことを発表 • 保険の重要性と、近隣の人々、飼料会社、獣医師等からの声かけが非常に力となったことを発表
	<p>岡崎牧場 代表 岡崎 義博 様 (H30年豪雨災害の報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 平成30年の西日本豪雨で牛舎、管理機器が冠水、飼料も流出し、牧場への道路が寸断され1週間飼料搬入ができなかったこと • 県事務所による道路復旧対応、飼料会社、運送会社の協力で飼料が確保できたことを発表
	<p>有限会社 千代田ファーム 社長 中村 勲 様 (R3年豪雨災害の報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 令和3年の豪雨で養鶏場への道路路盤が崩壊、法面も崩壊して飼料搬入、鶏卵搬出が一時停止したことを発表 • 町役場、県事務所に連絡し、道路は応急措置され、使用できるようになったものの、法面は自家施工せざるを得なかったことを発表
	<p>日和産業（株） 三原工場 次長 坂本 竜一 様 (飼料製造・供給体制確保の報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 平成30年の西日本豪雨、東日本大震災、阪神淡路大震災による被災状況を発表 それぞれで被災した工場は1～3ヶ月操業停止 飼料運搬車が大型で主要道路復旧まで稼働できなかったことなど • 畜産経営者に対しては他の地域の自社工場で製造搬出対応したこと、その後は被災時のシミュレーション、連絡網の整備などの対応を発表
	<p>一般社団法人 広島県基金協会 常務理事 奥山 博 様 (基金協会対応の報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 被災経営者に対して配合飼料価格安定基金協会としての対応を説明 マルキン事業、畜環リース、クラスター事業などで、返済猶予などの対応を発表 • 県庁等行政と密に連絡をとり被災者の相談を受けるとともに災害復旧補助事業などの紹介を行ったことを発表

[ワークショップの概要]

全日畜 「自然災害」ワークショップ (広島)

日 時 : 令和3年10月21日(木) 13:00~15:30

場 所 : リモートによる Web 会議

発表者 : 宇田久康 広島県農林水産局畜産課 酪肉振興グループ 主査
瀧奥拓二郎 (農法) 萩原ハイランドファーム 代表理事
岡崎義博 岡崎農場 代表
中村 勲 (有) 千代田ファーム 代表取締役
坂本竜一 (株) 日和産業 三原工場 次長
奥山 博 (一社) 広島県配合飼料価格安定基金協会 常務理事
ゲスト : 西村昌幸 (一社) 広島県配合飼料価格安定基金協会 理事長

参加者 : 以下のとおり (発表者、ゲストを含む)

生産者3名、飼料荷受組合・飼料メーカー5名、県配合飼料価格安定基金協会5名、
行政機関1名、全日畜6名 計20名

◎ 自然災害アンケート調査結果のポイントについての話題提供

令和2年に自然災害の実態を把握するため全国・全畜種(乳用牛、肉用牛、豚、採卵鶏、ブロイラー)の畜産経営体にアンケート調査を実施したので、その調査結果のポイントの説明を全日畜神谷康雄専門員が以下のとおり行った。

説明概要

- 昨年、アンケートが回収できた経営体数は、459経営体で、有効回収数457の経営体の営農類型は、酪農112、肉用牛104、養豚92、採卵鶏94、ブロイラー26、酪農・肉用牛22、肉用牛・養豚4、肉用牛・採卵鶏1、採卵鶏・ブロイラー2となった。
- 自然災害の発生状況については、過去10年間に発生した自然災害に被災したか、被災しなかったか聞いたところ、「被災あり」が75%、「被災なし」が25%であった。回答者の農場所在別にみると、北海道、東北、関東、九州・沖縄の回答者の70%以上が被災している。被災の有無を畜種別にみると、「ブロイラー経営」が最も多く、86%が被災していた。これに続き、「採卵鶏

- 経営」が 79 %、「酪農経営」が 74 %、「肉用牛経営」が 73 %の順で被災が多い結果であった。
- 自然災害の内容をみると、「停電」、「畜舎倒壊・損壊」、「畜産施設倒壊・損壊」、「断水」、「家畜の斃死」、「有線・無線の通信回線不通」、「道路寸断」などが多かった。災害内容では、気象災害、地震災害による「停電」被害が多い結果であった。
 - 保険への加入状況については、全日畜の生産者は飼養規模も大きく、「損害保険への加入」は 57 %、「共済保険への加入」は 40 %と、比較的多くの経営者が保険に加入している。これは、近年の自然災害の多発に備えた、畜産経営体の危機意識が高まっている結果と言える。しかし、「損害保険未加入」が 17 %、「共済保険未加入」が 15%ほどあり、保険加入への普及・啓発が必要である。
 - 今後の優先度の高い防災対策は、「発電機設置」、「畜産施設の耐震・耐暴風・耐積雪構造」、「燃料備蓄」、「給水確保」、「飼料の確保ルート」、「発電機リース」の順となった。これらは、畜産経営における防災対策の最優先事項である。
 - 防災対応の課題は、「連携が脆弱なこと」及び「マニュアル未作成」が課題の上位に来ている。自然災害は、広域、多岐にわたり、対応する省庁は複数になることから、内閣府に内閣総理大臣を会長とし、国務大臣等を委員とする中央防災会議が設置されており、一元的に対応する体制をとっているが、その機動性の発揮に課題のあることが分かった。災害発生後の対応の課題は、「手続きの簡略化」が最も多い回答であった。
 - 以上をまとめると、
 - ① 回答をいただ経営体の農場所在地は、畜産主産地であるとともに、近年、地震や気象災害が発生した災害多発地にある。
 - ② 災害の内容では、気象災害、地震災害による「停電」被害が多い。また、豚、鶏の中小家畜の被害が多い。
 - ③ 優先度の高い防災対策は、「発電機の設置」、「畜産施設の耐震・耐暴風・耐積雪構造」、「燃料備蓄」、「給水確保」、「飼料の確保ルート」、「発電機リース」の順序で、発電機の準備が最優先。
 - ④ 生産者は、畜産経営のための防災マニュアルの必要性を認識している。

◎第一部 「事例紹介」

演題：広島県の畜産と災害への行政機関の対応

発表者：広島県農林水産局畜産課 酪肉振興グループ主査 宇田 久康 氏

要旨：

1. 広島県の畜産の現状

広島県は、中国四国地方の中央部に位置し、北部は中国山地に、南部は瀬戸内海に面し、県

土の75%が森林である。畜産は県農業生産の核となる役割を果たしており、中山間地域の農業・農村の活性化を図るうえで重要な位置を占めている。

5畜種の飼養頭羽数をみると、採卵鶏は全国4位の位置であるが、酪農23位、肉用牛24位、豚21位、ブロイラー30位と大体中位にある。令和元年の農業産出額は1,168億円で、うち畜産の産出額は40%、467億円を占めている。全国順位では、農業産出額は26位になっており、畜種別では鶏卵が5位に位置しているが、他の畜種は中位である。畜産物の生産量は、280万県民の需要を満たしている。

2. 近年の豪雨等の災害状況

近年の災害は、平成30年7月の豪雨、令和3年7月と8月の豪雨被害がある。

①平成30年7月の豪雨

平成30年7月の豪雨は、梅雨前線の停滞に伴い、広島県西部を中心に24時間雨量は、300mm以上を記録。死者行方不明者100名超、住宅被害14千戸超、土砂災害484か所、12河川で決壊など。

②令和3年7月の豪雨

7月7日～7月13日の累加雨量の多いところで400mm超。農地92ha相当の法面崩壊等、21か所のハウス等の浸水等被害。農地・農業用施設被害額61億円超。

③令和3年8月の豪雨

8月11日～8月25日の累加雨量の多いところで700mm超。広島県西部で甚大な被害。1,000か所を超える農地で土砂流入・法面崩壊等。152か所のハウス等（畜舎含む）の浸水等被害。この災害では、農地等への被害が多かった。

3. 被害等に対する支援

いずれの災害とも激甚災害指定を受けており、被災地に対して以下の支援を行った。

①農地の土砂流入・法面崩壊等は、一定規模以上の被災の場合、災害復旧事業による復旧工事を実施。

②家畜の被災は、農業共済に加入している場合に、加入内容により損害補償。

③農業経営の再建及び維持安定を支援するため、営農のための運転資金、農機具・施設等の再取得等に対し、低利な融資制度を提供。融資は基本無利息。

最後に、「令和3年8月11日からの大雨により被災された農林水産業に携わる皆様へ」のペーパーにより、国、県、市町村、及び関係団体が一丸となって復旧に取り組む紹介があった。

演題：豪雨災害により畜舎等の倒壊後、動産総合保険により早期復旧、規模拡大を実現

発表者：(農法)萩原ハイランドファーム 代表理事 瀧奥 拓二郎 氏

要旨：

1. 広島県山県郡北広島町で酪農専業経営を営む。飼養規模は、経産牛140頭、未經産牛30頭、育成牛40頭規模。経営面積は、イタリアンライグラス8ha、ソルガム8ha、トウモロコシホ

ールクroppサイレージ8 ha の飼料生産基盤を有する。年間の生乳生産量は1,400t。労働力は、家族労働2名、常雇い2名、外国人技能実習生3名となっている。

2. 省力、高生産性酪農経営を目指し、搾乳ロボット2基を5年前導入し、搾乳牛70頭規模から120頭規模に拡大。搾乳ロボットの導入で、経産牛1頭当たりの乳量は、27kg/日から33kg/日と約2割増加。規模拡大しても、雇用労働力は2名増となっているのみ。
3. 平成22年の豪雨災害及び令和3年8月の豪雨災害。平成22年豪雨では、7月11日からの豪雨により地盤が緩み、7月14日早朝、飼料畑の一部が崩壊した。飼料畑直下にある育成舎の半分が牛とともに下流まで押し流されたほか、畜環リース事業により建設した堆肥乾燥舎、堆肥舎の一部が損壊した。損害額（復旧経費）は、約5,600万円、成牛 育成子牛合わせて15頭を廃用淘汰した。

令和3年の豪雨災害は、8月11日から降り続いた雷雨により、ロボット搾乳機の基盤に影響し故障し、自宅事務所にあったロボット制御のPC2台が破損した。この復旧に3日を要し、この間、搾乳に支障が生じた。損害額（復旧経費）は、約150万円。

4. 災害後の復旧状況は、平成22年豪雨被害では、育成牛舎、リース事業堆肥舎ともに動産総合保険に加入していたため、被災施設の復旧は保険適用により円滑に行うことができた。令和3年の被害でも、動産総合保険で復旧対応した。平成22年豪雨は、激甚災害指定されたものの、萩原ハイランドファームは対応されなかった、しかし、県、町単独の事業で対応してもらった。
5. 被災後の対応で、共済保険に加えて、任意の保険にも加入していたのでスムーズに復旧ができた。緊急時対応用として、経費の許す限り予備機を整備することが必要と感じている。災害への対応では、近隣の人々、飼料会社、獣医師などから声をかけてもらったことが非常に心強く力になったことから、近隣の人たちや同業者、飼料メーカーからの声かけや協力が大きな力になった。ゆえに、近隣の人と人のつながり、声かけ、助け合いなど協力体制の確立が大切と実感している。
6. 行政への要望などは、次のとおり。

- ①へい死牛などへの共済からの保険金はすぐおりる。民間保険では対応が難しい農地保全、敷地、水路等への自然災害に対して、復興のために農業共済の特別制度での対応を考えて欲しい。
- ②中山間地に居住して畜産経営に従事している者は、近年の気候変動に危惧の念を抱いており、農地等の災害予防の制度創設を希望する。農地の必要な畜産経営などへの災害時対応の補助事業の充実をお願いしたい。

演題：西日本豪雨により牛舎冠水から再建、規模拡大

発表者：岡崎牧場 代表 岡崎 義博 氏

要旨：

1. 広島県安芸津町で肉用和牛繁殖経営を営む。平成 30 年 7 月の西日本豪雨で被災。被災後は、規模拡大を進めている。現況、繁殖和牛の成牛 28 頭、育成子牛 17 頭の規模であるが、繁殖雌牛 35 頭規模を目指している。令和 2 年の子牛販売は 8 頭。現在、1 人で和牛の繁殖管理、粗飼料確保に取り組んでいる。クラスター事業を活用して規模拡大をして、堆肥処理機械の導入により 100 時間の労力削減、超音波画像診断装置による繁殖管理技術向上などに取り組んでいる。
2. 平成 30 年 7 月の西日本豪雨災害で、牛舎前の幅 6m ほどの河川が氾濫し、濁流が牛の肩の高さまでに達し、飼料などの資材が流出し、家畜管理用の機械が冠水した。牧場付近の道路が寸断され、被災後 1 週間は餌が搬入できず、必要量の半分しか給与できなかった。牛は、濁流を飲み、下痢を発症、体調不良が続いた。

(被災時のビデオを紹介)



3. 災害後の復旧状況は、広島県西部土木事務所、東広島市役所の尽力により約 1 週間で道路が復旧した。また、飼料販売会社及び運送会社の協力により飼料搬入を行い、必要量を確保した。牛舎内の土砂搬出に家族総出で取組み、約 1 ヶ月で生産可能状態まで回復した。家畜共済組合の支援により、繁殖牛、育成牛、子牛の体調回復が図られた。
4. 行政の支援状況は、広島県東部土木事務所、東広島市役所による、早期の道路復旧が図られ、施設などの復興は、被災農業者向け経営体育成支援事業を活用した。

演題：令和 3 年 8 月豪雨被災の迅速な対応

発表者：(有)千代田ファーム 代表取締役 中村 勲 氏

要旨：

1. 広島県山県郡北広島町において、採卵養鶏を営む。萩原ハイランドファームとは、山を挟んだ反対側に位置する。採卵鶏 60 万羽(成鶏)規模の飼養規模で、鶏卵は、現在はまだ 8,000 トン/年であるが、12,900 トン/年を見込む。

令和元年から3年にかけて、全ての鶏舎を最新のウインドレス鶏舎に建て替えし、現在成鶏飼養羽数は50万羽であるが、近々に60万羽の飼養規模になる。労働力は、飼育管理部門23名、GPセンター26名の計49名である。鶏卵の出荷は広島県内であるが、年間鶏卵生産量の10%を卸業者を通じて香港等へ輸出している。鶏糞堆肥も約半量を東南アジアに輸出している。

2. 令和3年8月の豪雨で被災した。広島は花崗岩が風化した真砂土が多く、養鶏場とその周辺も同様であり、降雨による土砂災害が発生しやすく、令和3年8月11日以降、西日本を中心に発生した豪雨により、8月13日に県道から養鶏場に向かう進入路等が被災した。養鶏場への進入路は1本のみで、道路の50%の路盤が崩壊し、飼料の搬入が出来なくなった。また、場内の法面2カ所、高さ10mの土砂崩壊があった。農場への送電線は1本であるが、停電の被害は無かった。

3. 進入路等の復旧の状況は、被災当日朝に北広島町役場と西部建設事務所安芸大田支所に連絡し、当日中に応急措置がされたため、飼料の供給や鶏卵出荷は半日程度の遅延が生じたものの事なきを得た。しかし、進入路を出たT字路左折後の畑集落へ向かう県道崩壊か所についてはいまだに修復されていない。

農場前の町道は、災害以降は表面の舗装剥がれや陥没によって、車両の通行に支障をきたしているが、行政による早期復旧が見込めないため、自力で陥没カ所などの補修を行って何とか通行できるようにしている。

4. 行政への要望などは、次のとおり。

①県道69号(千代田～八千代線)の道路崩壊箇所の早期復旧を要請。当農場は60万羽の鶏を飼育しており、飼料供給路の寸断は経営への影響ならびに従業員の生命にもかかわる。

②県道から当農場へ進入する町道について、舗装ならびに排水側溝の土木工事の予算化により、完全な新設舗装を望む。

③場内2カ所で発生した土砂崩れに関し、補助金交付などによる復旧の後押しをお願いしたい。

演題：災害発生時の対応について

発表者：日和産業（株） 三原工場 次長 坂本 竜一 氏

要旨：

1. 全国に5カ所の飼料工場を有する。平成30年西日本豪雨災害、東日本大震災及び阪神淡路大震災の3つで被災した。東日本大震災では、八戸の飼料工場が被災したが、工場が内陸にあったので、津波の被害は免れた。阪神淡路大震災では、工場の操業が2ヵ月から3ヵ月停止した。
2. 飼料工場の被災で工場プラントの破壊、停電、断水などで稼働停止になった。飼料原料業者、運搬業者の被災で、工場への原料供給が止まった。稼働可能な工場でも、道路網の寸断で飼料を畜産生産者に届けられず、そのため、畜産生産者は、飼料不足、生産物の品質劣化などに

より生産物の廃棄に追い込まれた。

また、飼料配送トラックは大型車が大半のため幹線道路しか利用できず、裏道への迂回などの融通が利かない点も影響した。

3. 被災工場の稼働停止期間は1～3ヵ月、その間、他の自社工場で製造支援、もしくは他の工場へ応援を要請した。陸上輸送が困難な場所に対しては海上輸送で対応した。飼料原料の搬入が通常に戻るのに要した期間は概ね、1～2ヵ月。
4. 今後の対応については、①工場が被災した場合を想定し、被災工場の飼料を他工場で製造するシミュレーションを実施、②被災状況、従業員の安否確認のための連絡網の整備、③被災工場の人員を他の工場へ移すなど過重労働予防体制の確立などを実施している。

演題：自然災害に対する基金協会の対応

発表者：(一社) 広島県配合飼料価格安定基金協会 常務理事 奥山 博 氏

要旨：

1. 広島県は、これまで大規模な地震災害は少なく、中国山脈、瀬戸内海に囲まれ、台風の被災も比較的少ない地域であった。しかし、昭和63年7月の加計豪雨災害以降、4、5年おきに、豪雨による大規模な土砂災害が発生し、被害が常態化する傾向にある。

今までは大規模な畜産経営への被害は少なかったが、今後は、基幹施設の被災に備えた経営再開のための対応を整えておくことが必要である。

広島県における豪雨災害は、昭和63年から7件発生しているが、平成26年、平成30年、及び令和3年の豪雨被害は甚大であった。最近では、住宅地の被害も甚大である。

2. 自然災害に対する基金協会の対応

(1) 直接的な対応

基金協会が関与している配合飼料基金事業、子牛・牛豚マルキン事業、畜産環境リース事業及び畜産クラスター事業を実施した被災者に対し、積立金や返済金等納付の返済時期猶予措置の検討と対応、行政、他団体との調整を実施。

平成22年7月の梅雨末期豪雨によって、畜産環境リース対象の堆肥舎等の一部が損壊。環境リース借受時に、民間の動産総合保険加入が義務付けられていたため、保険で対応した。施設の財産処分手続きを畜産環境整備機構と調整を図りながら対応し、約2カ月で復旧させ、経営を軌道に乗せた。

東日本大震災の被災により移転した経営体が、平成30年7月豪雨（西日本豪雨）で再び敷地、道路に大量の土砂が流入し、経営中断を余儀なくされたため、畜産経営の畜環リース貸付金返済を繰り延べた。畜産環境整備機構と調整を図りながら繰り延べ申請の手続きを行い、平成31年4月に経営再開したところ、家畜伝染病等の発生で、経営が軌道に乗るまで時間を要したため、翌年度も同様の繰り延べ措置を講じた。

自然災害ではないが、平成22年に火災により約1,000万円の畜産環境リース機械が焼失

した。畜産環境整備機構加入の動産総合保険適用で復旧対応した。

畜産環境整備機構と調整を図りながら、財産処分と保険適用等の手続きを実施。

(2) 間接的な対応

県庁と連絡を図りながら、畜産経営の被災情報（直接被害、飼料搬送・畜産物出荷障がい）を把握（飼料メーカー、販売会社から情報収集）。

被災者からの相談対応（補助・融資事業の紹介、県庁との連絡調整）。

災害復旧補助事業の紹介（豪雨災害への復旧支援策 H30. 7、農林水産省HPの逆引き辞典）。

(3) その他

ハザードマップを活用して、牛舎とその周辺の状況を把握し、土砂災害や洪水等の危険地域にある場合は、積極的な動産総合保険加入等を検討する。また、事前に飼料搬送ルート上の危険箇所を確認し、迂回路等を検討しておく。

警戒レベルに応じた安全確保対策を事前に決めておく（経営者、従事者、家畜の安全確保）。

被災後は、写真、動画撮影を確実にやり、補償対応に備える。

畜産関係の災害復旧ボランティア体制の構築を検討する。

配合飼料基金協会においては、平成 30 年 7 月豪雨以降、基金協会職員や事業嘱託員の安全を図るため、警報発令や警戒レベルに応じた業務体制を定めている。

(事例発表などを受けた専門員 2 名の感想など)

神谷専門員：

- ① 萩原ハイランドファームは、平成 22 年と今年の 2 度にわたる豪雨災害を経験された。幸い、施設は動産総合保険に加入していて復旧は保険適用により円滑にされた。近年の災害多発で、規模の大きな経営者は損害保険、共済保険に加入しておられる実態が全日畜のアンケート調査で判明している。今日の発表でも、防災対策における保険加入の重要性を改めて認識した。しかし、これだけ災害が多発すると保険料も上がり、萩原ハイランドファームの要望でも出ているとおり、農業共済制度のインフラへの特別制度の創設なども今後重要と感じた。
- ② 畜産経営は、条件不利地域、災害多発地に立地している。本日の発表者の経営者の方々も山間地に農場が立地し、災害の発生で進入路の崩壊、農地の流出などの災害を被りやすい地域での経営です。萩原ハイランドファームの要望のように、農地の必要な農業への災害対応の手厚い補助制度の創設、農地の災害予防制度の充実は、今後の国土利用を考えて行くうえで、重要なポイントだと思います。

全日畜では、今年度、農畜連携による畜産経営の強化調査も始めているが、我が国の国土利用を考える上で、この視点もポイントです。コメ消費の減少及び担い手不足や高齢化による労働力不足で、農地の耕作放棄地や遊休地が益々増加している中で耕作放棄地などの有効活用は、畜産サイドからみると、自給飼料生産拡大の絶好の機会である。国土有効利用による食料自給率向

上の観点からも、畜産サイドからの積極的なアプローチが求められている。地方の活性化が言われているが、条件不利地域に立地する畜産経営への災害対策のみならず、自給飼料生産拡大への手厚い支援が地方活性化に結び付くことを、今日の発表を聞いていて、改めて認識した。

山田専門員：

本日の事例発表をお聞きして、近年豪雨による災害が多発している実態がよく分かった。度重なる豪雨災害に見舞われ、リスクマネジメントの大切さを改めて認識した。

- ① 災害時は協力体制が重要である。瀧奥さんの発表にも「災害への対応では、近隣の人と人のつながり、声かけ、助け合いなど協力体制の確立が大切と実感している」とあったが、集落における協力体制が重要で、相互扶助による「ゆい」制度のような助け合いがポイントと思う。
- ② 災害防止には、日頃の備えが重要。災害対策は、時間との闘い。災害対応では、タイムライン防災のような時間軸に応じた対応策を決めておかなければならないと思った。優先順位をつけて、それぞれの段階でどう行動するか役割分担を含めて予め決めておくこと。災害防止は、「心の備え」と「物の備え」の両面から点検できる災害指針を行動分担も含めて作成しておき、迅速に対応するため、事前に訓練することも必要と考える。

◎第二部 「意見交換」

宇田(広島県)：

岡崎牧場の水害による被害はどの程度か。金銭的なサポートはどうか。

岡崎(和牛繁殖)：

被害額は1,200万円ほどになった。自己資金で400万円、残り800万円は、借り入れた。農協の融資は、農協ごとに異なるのでチェックが必要である。激甚災指定されたので、元本返済2年据え置き、金利はゼロとなった。ただし借り入れまで4カ月かかった。

宇田(広島県)：

瀧奥さんは、動産総合保険に加入していて、動産総合保険により復旧対応したとのことであるが、復旧経費は強制加入の保険だけで間に合ったのか。

瀧奥(酪農)：

平成22年及び令和3年のいずれの豪雨災害とも、動産総合保険に加入していたため、スムーズに復旧できた。自主的に任意保険に加入していたので、他の資金融資を得なくても災害対応ができた。今回の災害を通じて、人との付き合いが大切と感じた。被災した後、1週間、10日間と多くの人が見舞いに来てくれ、復旧の手助けもしてくれた。畜産の復旧には一般の人は手を出せないの、酪農仲間、共済組合関係者、特に獣医師には支援をいただいた。あまりにも効率化していたので、余裕のない経営を行っていたが、これでは飼料の手配、家畜の

ケアも必要な中で、災害に太刀打ちできないのではないかと思った。搾乳ロボットなどを導入して、作業効率の向上を図ったが、落雷など自然災害に対しては、弱いところもあるので、決して油断してはならない。もう少し、余裕を持った経営を目指し、金銭も重要なが、災害が起きても復元できる気力や思い入れをもって経営していきたい。

宇田(広島県) :

千代田ファームの被害額は、生産物の被害はあったのか。

中村(採卵鶏) :

生産物に対する被害はなかった。農場の法面2カ所の崩落により建物の壁面が破損した程度、被害金額の算出は難しい。1カ所の木造の鶏糞発酵施設が一部崩壊したが、損害保険に加入しており、復旧に要する資金は保険で賄えた。保険は建物など施設のみ。法面の復旧については、建設業者とも相談したが、1~2千万円かかるとのことで、従業員と私で自ら復旧した。しかしこれにも人件費、機材費など経費がかかっているため、間接的な損害と言える。

内田専門員 :

岡崎牧場は、飼料も流出して被災後1週間、餌が搬入できなかつたようだが、この間の飼料はどのように確保したのか。

岡崎(和牛繁殖) :

1週間は必要量の半分しか給与できなかつた。近隣農家から飼料を分けてもらったほか、一時期、草だけを給餌した。1週間後は、飼料会社や運送会社の協力により飼料搬入を行い、必要量を確保した。

内田専門員 :

荻原ハイランドファームでは、落雷により搾乳ロボットを制御するPC2台とも破損し、復旧に3日間を要したとあるが、この間どのように搾乳したのか。乳房炎の発症はなかつたのか。また、保険等での希望、要望はあるか。

瀧奥(酪農) :

搾乳せず牛には我慢させた。なんとか乳房炎にはならなかつた。搾乳ロボットを導入して5年目になるが、ロボット搾乳は待たなして24時間稼働する。もう1台、搾乳ロボットが欲しい。1年ごとのサポート契約であったが、被災時は北海道のサポート会社に再三再四お願いして、北海道から代わりのPCを空輸してもらい、広島空港に取りに行った。

保険については、施設は動産総合保険でほとんど対応できた。融資も受けなかつた。近隣に保険代理店の職員が住んでいて、保険を勧められ入っていたのが功を奏した。農業共済制度で農地保全、敷地整備、水路整備など復旧に要する補償の特別制度があることを希望する。農業共済制度による家畜個体の補償では、月齢に応じて金額が設定されているので、未經産牛は補償額が少ない。災害時には特別な配慮が必要と思うので、こうした点に配慮した制度改正をお願いしたい。

内田専門員：

千代田ファームでは停電はなかったのか。職員の通勤路確保、連絡体制、職員の安全確保などに問題はなかったか。千葉では台風災害のとき、長期間にわたり停電し、自家発電機での対応も燃料確保、発電機の長期運転によるダウンなどの課題が生じた事例もあった。

中村(採卵鶏)：

停電はなかった。農場への通電は1本であり、停電時の対応を考えておく必要があるかもしれない。従業員とは、スマートフォンのラインで連絡を取り合い安全確保に努めた。

内田専門員：

日和産業では、緊急時の会社としてのリスクマネジメントはどうしているのか。被災工場で飼料製造が出来なかった時に、他社工場へ応援要請したとあるが、緊急時に備えて、他社とは相互支援の提携をしているか。また、得意先が被災した場合、農場の被災状況の把握はどのようにしているか。また、経営者から飼料メーカーへの支援要請は、どのような案件が多かったか。例えば、飼料代金の延滞措置、職員派遣、へい死した家畜・家禽の処理など。

坂本(日和産業)：

阪神淡路大震災のときは、緊急時のリスクマネジメントのマニュアルなどなかった。現在は作成しているが、東日本大震災のような災害が発生した場合に対応できたか疑問である。

他社との緊急時の場合の連携については、自社工場が被災した場合を想定して、被災工場の飼料を他工場で製造するシミュレーションを実施している段階。

得意先の生産者の被災状況は、生産者と連絡をとり、被害の状況を確認するようにしている。生産者から連絡がくる場合もあれば、こちらから電話する場合もある。経営者からは、ヒトとモノの要請が多い。人的支援を行い、他メーカーからの飼料を提供することもあった。なお、三原工場に対して資金面での支援要請はなかった。

内田専門員：

生産者の給与飼料は多銘柄あり通常数百種類あると言われているが、災害時の生産者からの要望にはどのように応えているのか。また、陸上輸送が困難な場合、海上輸送とあるが、内航海運を直ぐに行うのは不可能ではないか。例えば、外国人船員が乗船している場合、入港できる港が限定されるため、緊急時は対応できないと聞いた。緊急時の輸送はスムーズにいったのか。

坂本(日和産業)：

被災当時は原料も入らなくなり、手元にある飼料原料での対応となり、1種類に限定した。緊急時は生産成績が落ちることを覚悟で、まずは家畜を死なせないための維持飼料の確保が第一。海上輸送に関して、規制は問題なく、スムーズにいった。荷姿はバルク車でバラ積での対応だったのでフレコンに代える必要があった。しかし、フレコンバッグの手配に時間がかかった。

松原専門員：

道路の不通カ所の復旧が遅れている要因は何か。復旧は、市町村の災害査定を急ぐ必要がある。市町村の要員不足があるのではないか。

宇田(広島県)：

道路の場合は畜産担当部門では対応できないので、土木関係の部署での対応となる。農林関係は、ため池、水田、畑などの被害は、県の地方技官が現場に出向いて査定をしている。市町村の人材不足で情報が入りづらい面はある。災害状況に係る情報は、市町村→県→農水省本省への流れで上げられる。畜産部門は、情報が入りにくい面はある。むしろ、畜産外郭団体の方が情報を早く入手している。普段、畜産団体は飼料会社との付き合いがあり、直接、飼料メーカー、乳業メーカーなどから情報を得やすい立場にある。

片山(岡山県基金協会)：

平成30年の豪雨被害で真備町をはじめ多数の死者を出し、農林関係で257億円の被害が出た。畜産部門は2.5億円の被害額で、30経営体程度の被災であった。農地や飼料畑の冠水による被害である。鶏舎の浸水による補償も少しあった。災害については、予防的なことは常に考えておく必要がある。今日の話の中でも出ていたが、保険への加入は必須であり、自家発電機の導入が必要である。災害発生時は、地域で連携した対応により予め定めた避難計画に沿って行動すること、そして、復旧にはボランティアなどの支援受け入れ体制の確立なども必要である。ヨコとタテの連携が重要と思う。

米田(鳥取県基金協会)：

鳥取県は比較的災害の少ない県であるが、近年災害は増加。日本海側に位置し、積雪によるビニールハウスの倒壊などの被害が出ている。これまで、県は災害の都度対応してきたが、災害の形態はその場、その時で異なり、網羅的な対応はできない。また県は、国の復興事業を補完する形で対応してきた。災害対応は、事例を良く研究しておく必要がある。互助体制により、援農隊を組んで災害対応している。行政と農協などが一体となって事例研究をしており、例えば、北海道の胆振東部地震におけるブラックアウトによる自家発電機の導入による対応などを研究している。すべてに対応することはできないので、事例研究は重要である。

小山(中国物産)：

被災された生産者の人にお聞きしたい。被災された人はこういうところをこうして欲しいとかいう要望はあるか。

瀧奥(酪農)：

要望よりは、被災したくないというのが本音。先ず7月は瓦礫の撤去などに追われ、仕事ができなかった。また再生産の準備、資金繰りなども必要だった。そのあと今後災害が起こったときに対応できないのではないかとこの恐怖感から、1ヵ月かけて自社の従業員1人に機械1台付けて畑地の周り、水路、法面を徹底的に整備した。

岡崎(和牛繁殖) :

正確な情報を一刻も早く入手したい。

中村(採卵鶏) :

土砂災害とは違うが、落雷により畜舎に設置した警報装置の電子機器が破損した。夜間で無人だったため、警報システムも被害を受けた。今は、スマート技術も普及してきており、土砂災害のほかに、通信網の損壊による情報遮断の復旧への対応が求められる。こうした、電子機器などの破損への備えを考えておく必要がある。農場は、山間地に位置し、進入路は1本道、被害を受けたあと復旧の目途はたっていない。農場ができて30年経つが、道路の舗装ははがれ、通行する車がダメージを受けている。行政は予算がなく対応できないとのことだが、復旧を急ぐよう要望している。

三谷(オールインワン) :

飼料メーカーとして、大小の災害対応について、無力さを感じる時がある。今後の災害時のメーカーとしての対策のあり方、我々に何ができるか知りたい。自然災害への対応、生産者から相談を受けた時の返答をどうしたらよいかなどについて、マニュアルのようなものがあると助かる。

内田専門員 :

全日畜では、本調査事業において、自然災害危機管理マニュアルの作成を考えている。これは、畜産経営者のためのマニュアルであるが、今日のようなワークショップ、アンケート結果、セミナー、現地調査などで得られた知見を整理する予定であり、畜産経営におけるリスクマネジメント、事業継続計画の策定、災害の発生前、災害発生時、災害発生後の対応等に向けて参考資料として活用いただけるものである。生産者、飼料メーカー、機械メーカー、行政関係、畜産団体関係者など皆さんに是非活用してもらいたい。

山本(内外飼料) :

生産者の皆さんに伺いたい。被災して、生産者(お客さん)から要望があれば迅速に対応したい。どのように声かけをすればよいか。

瀧奥(酪農) :

飼料メーカーに期待するのは、先ずは声掛けである。平成22年の災害の時は、中部飼料がいの一番に声掛けしてくれた。飼料メーカーからの支援は心強かった。

中村(採卵鶏) :

飼料メーカーからの電話はありがたかった。やはり声掛けが一番。生産物の被害へのサポートを期待する。

岡崎(和牛繁殖) :

飼料の運搬支援が一番必要。

小河(マルサン) :

災害時に飼料を搬送する場合、通行可能道路の正確な情報を入手したい。道路状況をリア

リアルタイムで知らせてくれる SNS などのグループラインの整備が必要ではないか。災害時、広島県内では通行できない道が多かった。令和3年8月の豪雨後、地域内の県道を見て回ったが、通行可能な道は1本しかなかった。それと、飼料生産のセーフティネットの確立が必要。仲介者を介した、他メーカーとの協力で危機的な生産者へ飼料供給できる体制づくりが求められる。

宇田(広島県) :

広島県の道路ナビ情報があるが、幹線道路の情報にとどまる。リアルタイムの情報となると、SNS などによる生産者同士の情報交換が大切。現地の道路では、通行不能を示す張り紙が最も正確だったという話を聞いた。緊急時には運送会社の情報が必要である。生乳の集乳車は路線情報を正確につかんでいる。特に、酪農専門農協は県内の80%のシェアがあるので、この情報は正確である。

内田専門員 : 本日出された議論を整理すると、

- ① 県畜産課からは、広島県の畜産の現状と近年の災害状況と被災農家への支援についての発表、生産者からは、平成22年、平成30年、令和3年の豪雨災害で実際に被災した生々しい状況報告があり、資料やビデオを拝見して、被災状況の大きさを改めて感じた。日和産業からは、飼料工場の災害対応に関する危機管理体制の話、広島県基金協会からは、自然災害時における基金協会の直接的、間接的対応について報告いただいた。
- ② 農林水産省の資料によると、平成30年の自然災害による被害額は5,679億円で、平成23年東日本大震災を除くと過去10年で最大であったと報告されている。近年の異常気象に伴って大規模な災害が多発して被害額も増加しています。
- ③ 昨年は、千葉、熊本、宮城、岩手においてワークショップを開催したが、出席者からは、「日頃の備えと仲間同士の相互扶助の大切さ」、「連絡体制の重要性」、「災害対応マニュアルによる準備の大切さ」などを指摘する意見がありました。
- ④ 本日出た意見では、災害を最小限に抑える対策について、人のつながり、国・県の支援、事後の対応のための保険加入の必要性などが出ていました。
- ⑤ 農林水産省のホームページでも、畜産農家向けに「自然災害等のリスクに備えるためのチェックリスト」を公開しているので、参考まで紹介します。

鈴木常務理事のまとめ

ワークショップ参加者に対し、多忙中の出席、貴重な内容の発言に感謝。

内田専門員にまとめに付加することでは、まず各発言から見えるのは、災害に遭わないように、また、遭った後にはそれを克服できるように自助努力はまず必要。次に仲間どうし、関係者どうしいつでも助け合えるような関係を持つておくことが大切。

それは、平成11年の広島豪雨で、災害対策本部に農水関係者として入れてもらったことが

あったが、最優先は人命救助、行方不明者捜索で、行政ベースでは畜産に関する情報などは後回しにならざるを得ないから。

ゆえに、情報は関係者同士の情報交換がこのような場合一番早いので、まずは関係者どうしのネットワークが重要と感じた。

加えて、災害の苦い記憶を再び呼び起こしてつらい思いの中で発表された発表者に感謝。これら貴重な発言を危機管理マニュアルに生かしていきたい。

全日畜「自然災害」ワークショップ(広島会場) 参加者名簿

開催日 令和3年10月21日(木)

会 場 リモートによるWeb集会 (zoomミーティング)

NO	区分	会社名等	都道府県	氏 名	備 考 等
1	発表者 (6名)	広島県 農林水産局 畜産課	広島県	宇田 久康	酪肉振興グループ 主査
2		農事組合法人 萩原ハイランドファーム	広島県	瀧奥 拓二郎	代表
3		岡崎農場	広島県	岡崎 義博	代表
4		(有)千代田ファーム	広島県	中村 勲	代表
5		日和産業(株) 三原工場	広島県	坂本 竜一	次長
6		(一社)広島県配合飼料 価格安定基金協会	広島県	奥山 博	常務理事
7	ゲスト	(一社)広島県配合飼料 価格安定基金協会	広島県	西村 昌幸	理事長
8	調査専門員 (4名)	全日畜 専門員	—	内田 賢一	調査担当
9		全日畜 専門員	—	神谷 康雄	調査担当
10		全日畜 専門員	—	山田 哲郎	調査担当
11		全日畜 専門員	—	松原 英治	調査担当
12	全日畜 (2名)	常務理事	—	鈴木 一郎	主催者 総括
13		専門員	—	伊賀 啓文	主催者 オペレーション
14	オブザーバー	(一社)岡山県配合飼料 価格安定基金協会	岡山県	片山 圭二	常務理事
15		(一社)鳥取県配合飼料 価格安定基金協会	鳥取県	米田 和晃	常務理事
16		(一社)島根県配合飼料 価格安定基金協会	島根県	横田 司	常務理事
17		中国物産(株)	岡山県	小山善久	専務取締役
18		(株)オールインワン	広島県	三谷和彦	中国支店 営業担当
19		内外飼料(株)	広島県	山本晋一	社員
20		(株)マルサン	広島県	小河誠二	社員
		(計)		20人	

○ リモートによる Web 会議のようす

広島県配合飼料価格安定基金協会の西村昌幸理事長による開会挨拶

概要：広島県は自然災害の少ないところであったが近年豪雨災害が頻発してきた。そのような中でこのワークショップを開いたことには大きな意義がある。災害時の畜産経営の対応、飼料供給の対応などについて、出席者の有意義な意見を引き出し、これから作成する「災害危機管理マニュアル」に活かしてもらえるよう期待する。



WEB会議画面



一般社団法人
全日本畜産経営者協会
ホスト会議室
(貸し会議室)

「アンケート調査」にご協力をお願いします



このアンケートは、全日畜が取り組んでおります「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」のために活用させていただきます。本日の全日畜ワークショップ「自然災害に強い畜産経営を目指して（広島会場）」についてご感想等をお聞かせください。

問1 どちらからの参加ですか。以下のいずれかに「○」印を記入してください。

- (1) 畜産経営者 (2) 飼料メーカー (3) 畜産団体等 (4) 行政機関
(5) 農業大学校等 (6) 施設機械メーカー
(7) その他（具体的に：)

問2 問1で、(1)畜産経営者と回答した人にお聞きします。あなたの畜産経営の「畜種」は何ですか。以下のいずれかに「○」印を記入してください。（複数回答可）

1. 酪農
2. 肉用牛
3. 養豚
4. 養鶏（採卵鶏）
5. 養鶏（ブロイラー）
6. その他（具体的に：)

問3 本日のテーマ「自然災害に強い畜産経営を目指して」の「関心度合い」についてお聞きします。

1. 大いに関心がある
2. 関心がある
3. あまり関心がない
4. 全く関心がない
5. その他（具体的に：)

問4 本日のワークショップは役に立ちましたか。

1. 非常に役に立った
2. 役に立った
3. あまり役に立たなかった
4. 全く役に立たなかった
5. 分からない
6. その他（具体的に：)

裏面も記入をお願いします。

問5 ワークショップの時間配分等はいかがでしたか。(複数回答可)

1. 適切であった
2. 長かった
3. 短かった
4. 意見交換の時間が少なかった
5. その他(具体的に：)

問6 自然災害に強い畜産経営の実現調査事業(目的：自然災害に強い畜産経営の実現)は、これからの畜産経営において重要とお考えですか。

1. とても重要である
2. ある程度重要である
3. あまり重要ではない
4. 全く重要ではない
5. 分からない

問7 本日のワークショップのテーマ「自然災害に強い畜産経営を目指して」について、ご意見等を自由にお書きください。

(自由意見欄)

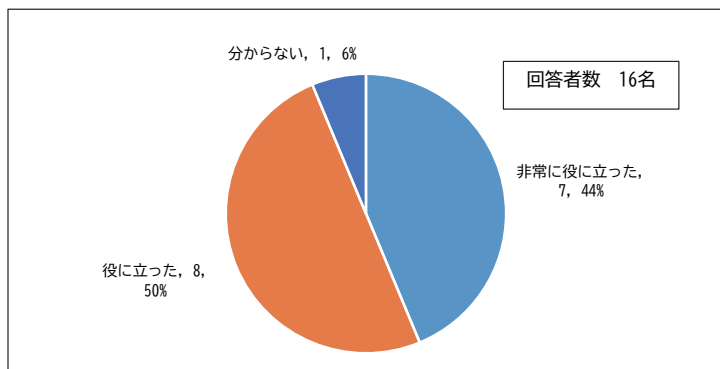
ご協力、ありがとうございました。

令和3年度自然災害第1回ワークショップ 広島会場 アンケート結果

(回答者総数 16名)

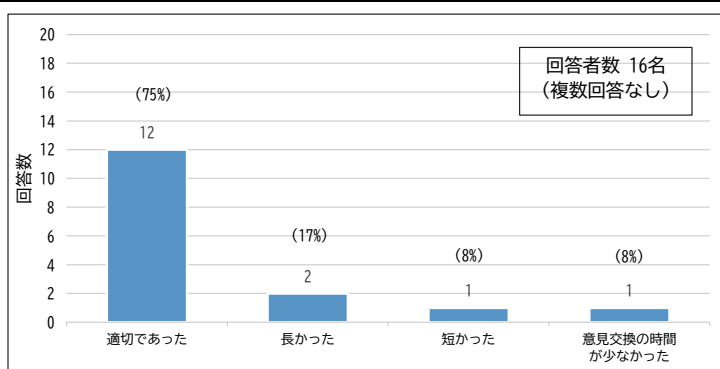
問1 回答者の属性	
<p>行政機関, 1, 6%</p> <p>畜産経営者, 3, 19%</p> <p>飼料メーカー, 5, 31%</p> <p>畜産団体等, 7, 44%</p> <p>回答者数 16名</p>	<p>回答者の属性は、「畜産団体等」が44%、「飼料メーカー」が31%、「畜産経営者」が19%、「行政機関」が6%であった。</p>
問2 畜産経営の「畜種」	
<p>回答者数 3名 (複数回答なし)</p> <p>酪農 (33%) 1</p> <p>肉用牛 (33%) 1</p> <p>養鶏(採卵鶏) (33%) 1</p>	<p>前問で、「畜産経営者」と回答した者の「畜種」については、「酪農」、「肉用牛」及び「養鶏(採卵鶏)」が33%ずつであった。畜種複合の経営体はなかった。</p>
問3 「自然災害に強い畜産経営を目指して」への関心度合い	
<p>大いに関心がある, 7, 44%</p> <p>関心がある, 9, 56%</p> <p>回答者数 16名</p>	<p>ワークショップのテーマである「自然災害に強い畜産経営を目指して」への関心度合いは、「大いに関心がある」が44%、「関心がある」が56%で回答者全員の関心が高かった。</p>

問4 本日のワークショップは役に立ったか



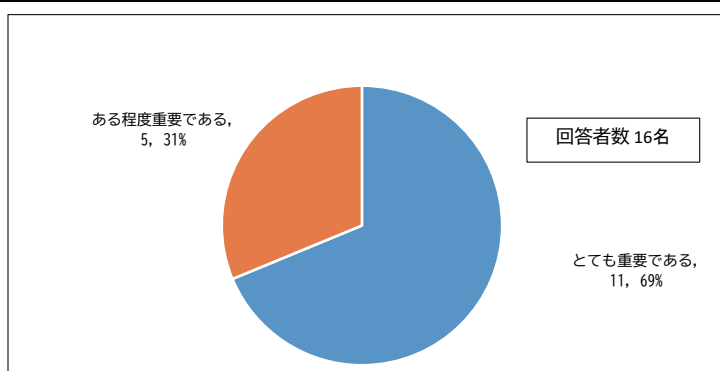
ワークショップが役に立ったかについては、「非常に役に立った」が44%、「役に立った」が50%と回答者の多くが肯定的な回答をしている。他方、「分からない」が6%あった。

問5 時間配分について



時間配分については、「適切であった」が75%であった。そのほか、「長かった」が17%。「短かった」と「意見交換の時間が少なかった」が8%ずつあった。

問6 「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」は重要と考えるか



「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」は重要と考えるかという問に対しては、「とても重要である」が69%、「ある程度重要である」が31%と、回答者全員が肯定的な回答をしている。

問7 (自由意見)

・畜産経営の現場は畜産公害のリスクを考慮し山間部（人里離れて）営まれており、弊社牧場もそのような環境である。市町村が出しているハザードマップなど全く無視して良いような場所で、そういう現場で生鮮食品（生乳生卵等）を生産しないといけないのが、現実だと思う。

自然災害に強い畜産経営をと思い、いつ来るかわからない天災に準備するのは、大変なエネルギーがいることで、農場における対応として、崩落しそうな危険な法面、豪雨時溢れそうな脆弱な水路、小規模の雨で流れてしまっている農道等広い農地（敷地）が必要な畜産経営には、避けて通れない課題だと思う。

被災時に土砂崩れによる法面崩落、乳牛多数生き埋めとのテロップが流れて、もう少しで、朝のモーニングショーで放映されそうになったのを、市町の担当者から放映の意向を聞かれ、”一切情報提供しないでください。”との申し出に対応して頂き、上空をヘリコプターが飛ぶことはなかった。その後若い警察官の人を変え場所を変えての質問攻めを受け、事後対応に追われる身に、あれは何の意味があったのか、今でも不思議である。

近隣の住民の方々、知人、親戚、業者方、行政職員、本当に多くの人にお見舞いを頂き、声もかけて頂いた。それがあったから今でも営農していたといっても過言では無いと思う。

自然には、勝てない。将来あるべき姿は、有事の時の為に今自分に出来る精一杯の準備と、不幸にして災害に会ってしまえば、又頑張れるように声掛けをしてもらい、継続していくしかないのかと思う。

現状と課題は十分に認識している。毎日現場で長年暮らしていれば、把握できる。しかしそれを克服するには、膨大な費用がかかり、いつ来るとも知れない天災に備えるのは大変な事である。

災害時に人命が一番だといった意見があったが、当然そうだと思う。しかし、東日本大震災の時放射能から逃れるためフリーストールの連動スタンションに繋がれたまま無人になった牛舎で首を垂れて死んでいる牛達の放映があった。ヨーロッパでは、家畜の生活環境によって商品価値が違うという報道があったが、日本もそのうちそういう時代が来るのではないだろうか。

・生産者及び関係者の方々の貴重な話を聞くことができ、今後の業務に大いに参考となる、大変有意義なリモート会議だった。

本県も毎年のように各種災害が発生し、甚大な被害が生じている。今後は、家畜伝染病と併せ、自然災害も、日頃から生産者及び関係者が一体となって、予防及び発生時の対応等について、考えておかなければならない課題であると痛感している。

・広島会場でのワークショップは、今年2回の水害を受けたばかりで、生産者から生々しい体験談が聞けて、とても臨場感のあるWSとなった。

・畜産経営管理マニュアル、もしくは災害時対応マニュアル作成が必要。広島版もしくは中国地方版（可能であれば）畜産経営者（本日参加された）の支援が求めていること等、1つでも多く対応、実行できる環境にしてほしい。もちろん弊社も可能な限り力添えしたい。貴重な会に参加させてもらい感謝したい。

・事例発表を聞き、次のことが大切と感じた。1)畜産経営者自らの努力(損害保険対応、損害の予測、災害復旧制度の把握、被災後のシミュレーション等)の大切さ 2)行政との連携(道路管理者との連携、被災事業相談等) 3)相互扶助(畜産における災害ボランティア体制(ボランティア登録、復旧機械の登録、ボランティア保険加入等)検討、経営者グループ間の話し合い、行政、団体、畜産経営者との話し合い等)

・自然災害は国民全体の課題であり、畜産経営者にとってとても重要な課題であり、災害対策のため指針やマニュアルを作成して安心して畜産経営ができるように努めてほしい。

- ・災害はいつ発生するかわからない。その災害に対し、色々対策が必要であると改めて感じた。その対策に対し、準備するため畜産経営者へ手厚い対応をして頂けるとよい。
- ・災害に遭われた農家への迅速な対応をお願いしたい。このような場を開いてもらい実際に体験された農家の話を伺い、とても貴重な時間だった。今後も災害は起こることを前提に、過去の事例を踏まえ畜産経営者、飼料メーカー、運送業者等への協力をお願いしたい。
- ・今後も継続的に会合や広く意見をとることが大事だと考える。事務局の方も変だと思うが、是非続けてもらえたらと考えている。
- ・今回は直接被災された生産者の意見がメインだったが、間接的に影響を受けた生産者(出荷先が被災したため生産物の出荷停止等)の意見や、その際の国、県、関係団体、取引業者等が行った対応例等より多くの情報発信を願いたい。
- ・今回は、災害で被害を受けた後の対応と事前の準備について、非常に参考になる意見が聞けた。次は、被害を軽減する対応か聞ければよい。



「全日畜」は畜種横断の畜産経営者の団体です

全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>



全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>